

準被災地・茨城県の鍼灸ボランティア実施の報告

～受療者のアンケート調査から～

前田尚子¹⁾²⁾ 内田有紀¹⁾ 成島朋美³⁾ 形井秀一³⁾

1) 筑波技術大学東西医学統合医療センター 2) 歩海助産院・あゆみ鍼灸院

3) 筑波技術大学保健科学部鍼灸専攻

【はじめに】

東日本大震災の発生直後の津波、その後の度重なる余震、原発事故、見えざる放射線の恐怖に疲労とストレスは次第に大きくなった。また、茨城県は準被災地とされた。演者が在住する茨城県南部は被災したものの、被害は大きくはなかった。しかし、県央・県北では、大きな被災をし、更に、福島県から避難される方々の受け入れに、現地は多忙を極めた。東北では、多くの方が、ボランティア活動をされている報道もあったが、茨城県に関するボランティアの報道は少ないものだった。県内に在住する者として、医療従事者と母子の事が気になった。そこで、自分にできることでボランティア活動を行うことを思いたった。県内に限った企画を立て、多くの方に協力を頂きながら、鍼灸ボランティアを行った。鍼灸ボランティアを受けられた方々に、アンケートの協力を得られたので報告する。

【方法】

1. アンケート期間および実施場所

4月17日に那珂市、コミュニティセンターにて5時間、5月1日水戸市、青少年会館にて5時間、5月4日北茨城市、市民体育館・避難所内1時間、同日マタニティケアいとうにて3時間、6月16日高萩市、高萩協同病院にて5時間、7月31日東海村コミュニティセンターにて2時間で行った。表1 図2

2. 対象

計5回に、茨城県央・県北にて、延べ13名の鍼灸師に鍼灸ボランティアを受けた者148名を対象とした。鍼灸師は、5名で行った。

3. 方法

アンケート用紙は無記名とし、受付で、ボランティアを受ける前に問診票と共に受療者に渡した。受療終了時に、術者から、アンケートの協力について一言促し、別室にて記載された後、ボランティア協力者の助

産師による回収をした。

表 1

回数	期間	場所	受療者数	アンケート数	アンケート有効回答率(%)	鍼灸師数	時間
1	4.17	那珂市 コミュニティセンター	25	25	100	3	5
2	5.1	水戸市 青少年会館	48	47	97.9	4	5
3	5.4	北茨城市市民体育館・ マタニティケアいとう	26	23	88.5	3	4
4	6.16	高萩市 高萩協同病院内	36	36	100	1	5
5	7.31	東海村 コミュニティセンター	12	12	100	2	2
合計			148	143	96.6	13	

4. アンケート内容

アンケート内容は、性別、年齢、被災の状況、当日の体調、施術効果、次回受療希望、広報の7項目については、選択肢による回答とし、ボランティアについて、よいと思った点、改善点の2項目については、自由記載とした。図1

【結果】

1. アンケートの有効回答率

アンケートの有効回答率は、全体で受療者148名中143名・96.6%、第1回目の有効回答率は100%、第2回目の有効回答率は97.9%、第3回目の有効回答率は88.5%、第4・5回目の有効回答率は100%であった。表2

2. 回答者

回答者は、143名。うち、男性25名、女性118名。年代は、10代2名、20代15名、30代68名、40代30名、50代14名、60代12名。男女比は、男性17.5%、女性82.5%であった。グラフ1

図 1

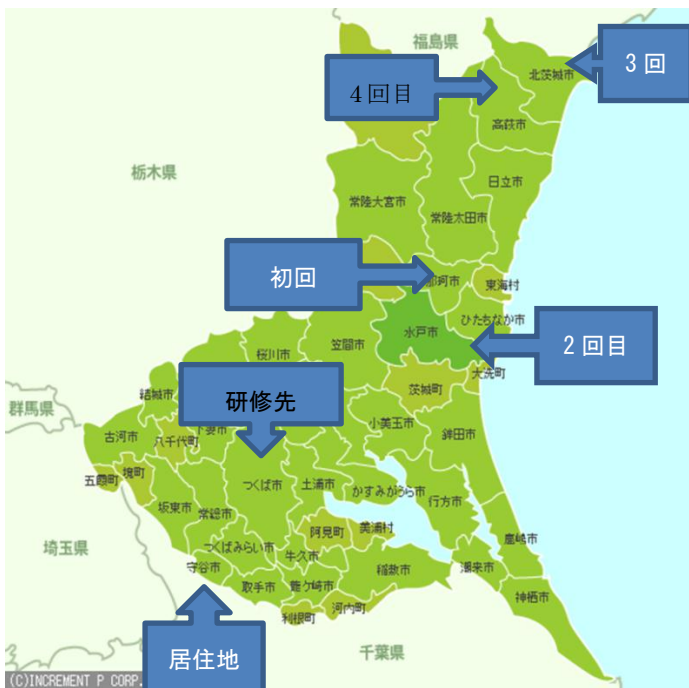
アンケート・東日本震災ボランティア

この度は予期せぬ、歴史的な大きな地震を体験してしまうことになりました。被害の大きさに言葉もありません。少しでもお役に立てたらと思いケアさせて頂きました。お手数ですが、下記のアンケートにお答えください。

年 月 日

- 性別は ①男性 ②女性
- 年齢は ①20代 ②30代 ③40代 ④50代 ⑤60代 ⑥70代～
- 今回の震災の大きさをうかがいます。
 - 家の中の物が落下した
 - 家・建物に被害が出た
 - 家が崩れた
 - 津波の被害を受けた
- 本日もつらかったですか？
 - 肩
 - 背中
 - 腰
 - 足
 - 腕
 - 頭
 - お尻
 - その他()
- 本日ボランティアを受けて、つらかったところは楽になりましたか？
 - 随分楽になった
 - 楽になった
 - 変わらない
 - 余計つらくなった
- 次回同じようなボランティアがあったらまた受けたいとおもいますか。
 - 是非受けたい
 - 受けたい
 - どちらでもない
 - 受けたくない
 - 絶対に受けたくない
- 今回のボランティアは、何で知りましたか。
 - スタッフから
 - 販売タウンニュース
 - センターの広報
 - インターネット
 - その他の
- 本日のボランティアでよいと思われたことを教えてください。
- 本日のボランティアで改善してほしい所、望むこと、よくなかった所を教えてください。

図 2 県内ボランティア開催地 2)



3. 身体的不調

当日身体的につらかった部位は、重複回答で、肩 104名・72.7%、腰 62名・43.4%、背中 48名 33.6%、

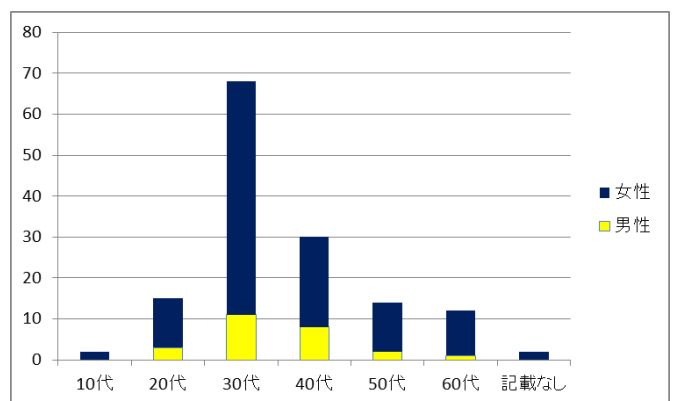
足 24名・16.8%、頭 16名・11.2%、腕 11名・7.7%となっていた。記載がなかったのが3名、特に症状がないという方が2名であった。

年代別にみる。4回目の受療者は医療従事者が対象なので、その回を除いた女性のみを集計した。88名の女性受療者のうち、年齢の記載がない2名と、10代2名を除いた、84名。症状の割合をみると、84名中、肩は80%前後に症状が出ているが、60代では低く54.5%。背中は、20・30・40代に40%前後で症状が見られるが、50代60代で低く、15%前後となる。腰部に症状が多く出ているのは20・40・60代となっていた。頭の症状の訴えがあるのは、13名にあり、うち10名が30代だった。グラフ2

表 2 アンケートの回答率等

回数	月・日	受療者数	アンケート数	アンケート有効回答率(%)
1	4.17	25	25	100
2	5.1	48	47	97.9
3	5.4	26	23	88.5
4	6.16	36	36	100
5	7.31	12	12	100
合計		148	143	96.6

グラフ 1 受療者の年代と性別



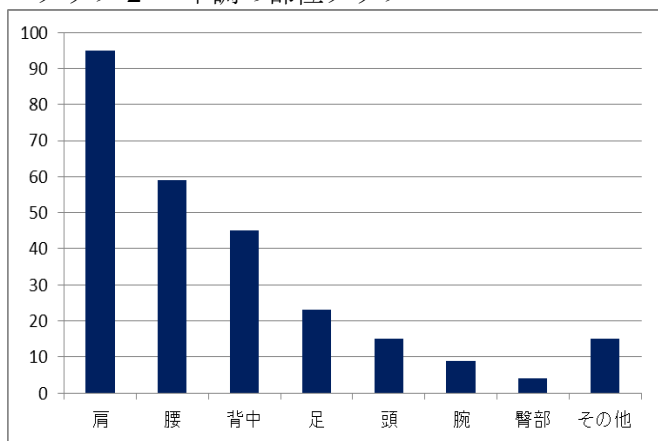
4. ケアの効果

ケアの効果について。全体で見ると、随分楽になった62名・43.4%、楽になった67名・46.9%、変わらないとの回答は3名・2.1%で、うち2名は身体的不調が特になかった方であった。1名が、余計悪くなったと答えているが、好転反応ととらえていると

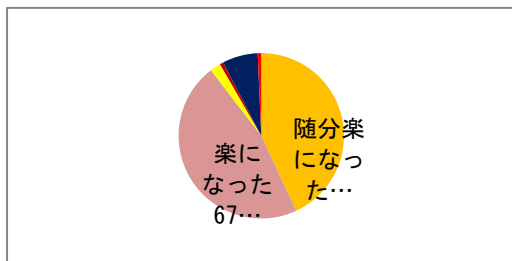
記載されていた。アンケートに記載されているときに、すでにだるさが出現していたということだった。記載がなかったのが 10 名・7.0%で、まだわからないとの回答が 1 名・0.7%であった。

開催回別にみると、第 1 回目では、随分楽になった 17 名・68.0%、楽になった 7 名・28.0%、変化なし 1 名 4.0%でした。2 回目では、随分楽になった 26 名・55.3%、楽になった 19 名・40.4%、余計つらくなった 1 名・2.1%、記載なし 1 名・2.1%。第 3 回目では、随分楽になった 11 名・47.8%、楽になった 10 名 43.5%、記載なし 2 名・8.7%でした。第 4 回目では、随分楽になった 4 名・11.1%、楽になった 24 名・66.7%、変化なし 2 名・5.6%、記載なし 5 名・13.9%、まだわからないという回答が 1 名・2.8%。第 5 回目は、随分楽になった 4 名 33.3%、楽になった 7 名・58.3%、記載なし 1 名・8.3%であった。グラフ 3 グラフ 4

グラフ 2 不調の部位グラフ



グラフ 3 ケアの効果

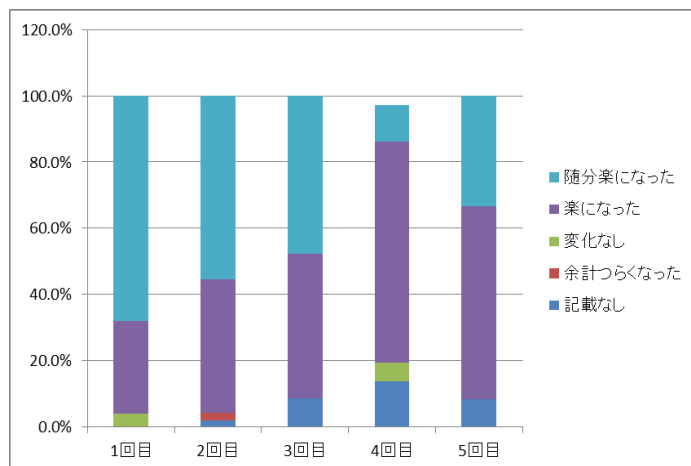


5. 次回の受療希望

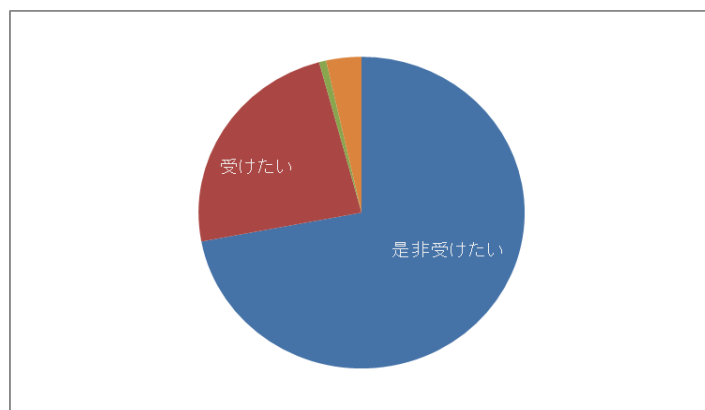
次回の受療希望については、是非受けたいとの回答が 103 名・72.0%、受けたいとの回答は 34 名・23.8%、どちらでもないと回答した方は 1 名・0.7%であった。どちらでもないと回答した方は、身体的不調が特になかった方だった。記載がなかったのは

5 名・3.5%であった。グラフ 5

グラフ 4 回別治療効果



グラフ 5 次回の受療希望



6. 自由記載

自由記載で、よかった点に関する回答は、疲れが取れた・楽になった 32、セルフケアを教えてもらった 24、施術の丁寧さ 20、気持ちよかった 18、リラックスできた 12、初めて鍼灸を体験できた 11、子どもを連れてこられた 9 であった。

反面、改善点やよくなかった点では、場所がわかりにくかった、2 時間以上待った、ポイントの説明をしてほしかった、もっと時間をかけて欲しかった、ボランティアということで色々なことは目をつむります。たしかに、みんなが同じところでやるのはいやな人はいやだと思います・・・という意見がそれぞれ 1 件あった。また、時間があれば背中もマッサージして欲しかった、という意見が 2 件あった。

【考察】

ボランティアは、開催の時期と地域が違ったためアンケート結果を比較できにくいものとなった。

今回のアンケートに関して、震災後の混乱した時期であり、ボランティアを実施することに重点をおいており、アンケートは記録的な意味合いでしかなかった。そのため、急遽作成したため十分な内容の検討をしないままに実施した。そのため、設問が「本日どこがつかかったですか?」としたので、震災後に新たに症状が出現したのか、震災前から現在まで症状が継続していたのかが、明確でなかった。症状が、震災後に出現したか否かの設問を設けることで、震災による症状か否かを明確にすることが必要だった。

現地でのボランティアを開催、実施するにあたり、助産師に協力を頂いた。広報も依頼させて頂いた。そのため、対象者が、子育て中の女性が中心となり、身体的な不調は一般の方のデータが少ないと考える。年代別に特徴をみていくと、60代では、肩の症状が低い反面、腰部の症状の割合が同じが、他の年代より特徴的だった。震災にかかわらず、年齢的な考慮をした施術が大切になると考える。一方、40代までは、背中症状もあることが特徴的だといえる。また、頭の症状は、13名・15.5%名にあり、うち10名・76.9%が30代だった。頭部の症状はストレスや睡眠に問題があると出現することがある。子育て中は、夜間に何度か目をさまし子どもの世話をするので、そのことも頭部の症状の一因かと考える。

ケアの効果は、90.3%の方が、随分楽になった、または楽になったと回答している。回答別にみると、第4回目には、随分楽になったという回答は11.1%と他の回より明らかに低い数字となっている。この回は、病院内の医療スタッフを対象にした。業務の空き時間に受領して頂く形をとった。他の回と違い、受療者は時間的な余裕のない状態で受療されている。その為、十分な時間を取れないので、簡単な問診を取り、パインックスの貼布のみとなった。また、一般の方より、日頃から重い労働を強いており、疲労があるためではないかと推測される。

次回の受療希望に関しては、95.8%が受けたいという回答で、好意的だった。

自由記載では、よかった点に関して身体的な変化の記載が多かったが、各鍼灸師が施術中にセルフケアについても話しており、そのことが、受療者には喜ばれていた。これは、余震が続く中、身

体的なケアを自分でもできるということが、安心感につながったのではないかと考える。反面改善点や問題点に関して、少数の記載があった。今後の参考にしていきたい。

【結語】

5回に及び、鍼灸ボランティアを行った。全回で延べ13名の鍼灸師により、受療者148名に施術を行った。今回の鍼灸ボランティアは、好意的に受け入れられた。

【おわりに】

今回のボランティアに協力して頂いた助産師達が、ケアをテーマにイベントを行いはじめた。また、福島からの避難者を対象にしたプロジェクトからの協力依頼もある。ボランティアの輪が広がることになった事を嬉しく思う。

また、医療従事者にボランティアを行うことで、医療現場での理解が深まることになればと考える。

最後になりますが、この震災で多くの方に色々なことがありました。それぞれの方が笑顔で暮らせることを願いつつ、報告を終わります。

《茨城県内の被災状況とボランティアについて》

【茨城県内の被災状況】

2011年3月11日14時46分。太平洋三陸沖を震源とした東日本大震災が発生した。当日は、茨城県北も震度6強を観測した。余震と呼ぶには大きな揺れが頻繁に起こった。

ライフラインの復旧にも数日かかった。県内で程度の差はあったが、皆不安で不自由な日々を過ごした。

まず、茨城県内の被災状況について報告する。住宅被害は、全壊棟1,984棟であった。100棟以上の被害があった市町村は、北茨城市、日立市、常陸太田市、水戸市、鹿嶋市、神栖市などであった。半壊棟は、13,491棟であった。100棟以上の市町村は、北茨城市、日立市、神栖市、潮来市であった。一部損壊は126,408棟に及ぶ。床上浸水は1,389棟で、300棟以上の市町村は、北茨城市、日立市。床下浸水は655棟に及んだ。人的被害は、死亡者24名、うち北茨城市で5名、東海村4名、水戸市、ひたちなか市、行方市で2名。重

症者は 33 名であった。津波の被害は、東北と比較すると比ではないのかもしれないが、県央・県北にも被害を及ぼした。輸出用の乗用車の炎上の様子が TV で放映されたのは、茨城県日立市の沿岸だった。鉄道も不通が続いた。県南では、都内への通勤者も多く、2 日間、帰宅難民となった方もいた。高速道路も被害が大きく、今回のボランティアの実施に関して障害となった。常磐高速道路の水戸 IC から那珂 IC にかけての路面の陥没と浪打が 150m に及んだ。復旧までに幾日かかるかと思われたが、6 日程で復旧した。県北までは時間を要したが、この素早い復旧に関しては、海外のプレスでも流れたと聞いている。

【ボランティアの企画について】

今回、車での移動手段をとったので、高速道路の開通を待ち、公共施設を利用した。暖房の使用のために電気の回復を待つなど、その時々状況を見ながら開催時期を見極めた。

また、県南の被災は比較的少なかったため、生活は

早期に戻り、その状況で、日常の仕事を止めてボランティアを行うことはできなかったため、休日を当て、日帰りとした。

今回のボランティアを行うにあたり、居住地より 80 ~ 130 km 離れているため、地元の助産師に協力を求めた。これは、筆者が助産師の資格を持ち、(社)日本助産師会茨城県支部の役員をしているため、県内各地の助産師の協力を得やすかったためである。助産師には、事前の場所の確保や手続き、広報、ボランティア当日の協力も頂いた。

ケアは、1 人あたり、20 分間とし、簡単な問診をし、身体的所見を触診を中心にした。反応点に対し、前柔捻を丁寧に行い、パイオネックスを貼布した。

《参考文献》

- 1) 茨城新聞社 東日本大震災 茨城全記録 特別報道写真集 茨城新聞社 2011.7.1
- 2) <http://www.mapfan.com/kankou/09/jmap.html>